二〇一七年四月二日　主日礼拝説教要旨

シリーズ・ヨハネの福音書㊶

見て信じる、信じて見る

（ヨハネ二〇・一～）

通訳は転瞬の芸術。咄嗟に判断し、最適の言葉を探す。特に諺などは安易な直訳にだけ頼るべきではない。表面的な意味は異なっていても、意味内容が等しいものを探し出し、はめ込めばこなれてくる。「こぼれたミルク」ではなく「覆水盆に返らず」「ローマではローマ人のように」は「郷に入らば郷に従え」、そして「見ることは信じること」は「百聞は一見に如かず」といった具合にである。

閑話休題。今朝の箇所には復活のイエスに、あるいはその証拠に出会った人々が四組登場する。イースターより少し早いのはご愛敬だが、今朝はここから二種類の信仰のあり方について考えてみたい。

一、ペテロと「愛弟子」

イエスの復活を信じた最初の人物はペテロとヨハネと目されるイエスの愛弟子であった。もっとも聖書はこの時点で彼らが復活の主に出会ったとは書いていない。だが福音書記者は彼らを「見ずに信じた」信仰者だとは言っていない。というのも彼らはイエスが復活したとしか考えられない証拠を確かに見たからである。それらは石の取り除けられた空の墓。その中にあった埋葬の時に十重二十重と巻かれた亜麻布。更には解かれないままに置かれていた、恐らくはイエスの口を閉めておくために用いられたと推測されるタオル様の布きれであった。特に脱ぎっぱなしの服のように、イエスの頭に結ばれていた布切れを見た刹那、彼らはイエスの「生」を確信したのであった。

二、マグダラのマリヤ

そもそもマグダラのマリヤこそ空になった主の墓の第一発見者であったが、脚力の差もあってか彼女はペテロたちから遅れて墓を覗き込んだ。そのとき彼女の目はみ使いを見、その声を聴いたが、最初の予断、つまり誰かがイエスの体を取り去ったという思いになおとらわれていた彼女はことを正確に理解出来なかった。しかしその後彼女はイエスの復活を体験する。きっかけは彼女を呼ぶ主の声であった。「なぜ泣いているのですか」という質問の時には解らなかったが一たび「マリヤ」と呼ばれたとき、彼女はその声の主がだれであるかを悟った。あるいは逆光でその顔は見えなかったかもしれない。しかし彼女の耳に届いた声は紛れもなく、あの日彼女の中から七つの霊を追い出した力ある救い主イエスのそれであった。そう彼女は主ご自身の声を「聞いて」信じたのだ。

三、弟子たち

第三のグループは弟子たちであるが、彼らもまた見、また聞いて、信じたグループである。彼らは朽ちない体によみがえったイエスが扉という制約を超えて部屋に入ってきたのを見た。また「平安があるように」という懐かしい声を聴いた。更には自らが地上生涯を過ごされたイエスご自身であることを示す手とわき腹の傷跡を見たのである。（二〇節）そのとき彼らが体験した喜びは復活のイエスから来たものであった。主の死によって一度は消え果てた彼らの信仰の焔は今や再び燃え始めたのだった。

四、トマス

そして最後はご存知、「懐疑主義者」トマスであった。彼は弟子たちの証言を信じることが出来ず、見える「しるし」を求めた。そんなトマスの「アンコール」要請になんとイエスは付き合ってくださった。わざわざ類似のシチュエーションを選ぶかのようにして、主はトマスのもとに来た。閉じられた戸、シャロームの祈り。すべては八日前と同じであった。懐疑的な彼を変えたのはやはり「一見」と「体験」の力であった。

＊　　＊　　＊

イエスの復活の証言者たちは皆主の復活を「見て」「聞いて」「触れて」信じた。こう聞くと中にはトマスよろしく「アンコール」を求める思いがむくむくと頭をもたげる方もおられるかもしれない。だがトマスの感動的な信仰告白、「我が主、我が神よ」の後に主イエスは何と言われただろうか。「見ずに信じる者は幸いです」である。イエスをただの立派な人間だと考えれば復活などあり得ないとなるのは解る。だがもしイエスがこの福音書の証言通り父のみもとから来たことばなる神だとすれば話は別だ。なぜなら聖書の神は創造の息吹によって森羅万象を作り、万物を保っておられる「いのち」そのものだからである。確かに復活の主を見ずに信じる信仰は信仰の真正性を試す試金石ではあるが、信じる者には神の永遠のいのちと喜びが与えられる。今日復活のイエスを信じよう。そして永遠のいのちを五感、いや六感で体験しようではないか。